

ROM レス品にて、外部 FlashROM 品種を追加する場合の説明

Rev 1. 01
DEFバージョン10. 10A仕様より

【対象CPU】

1. ROMレス品種が対象になります。(H8SX/1651、SH7264等)

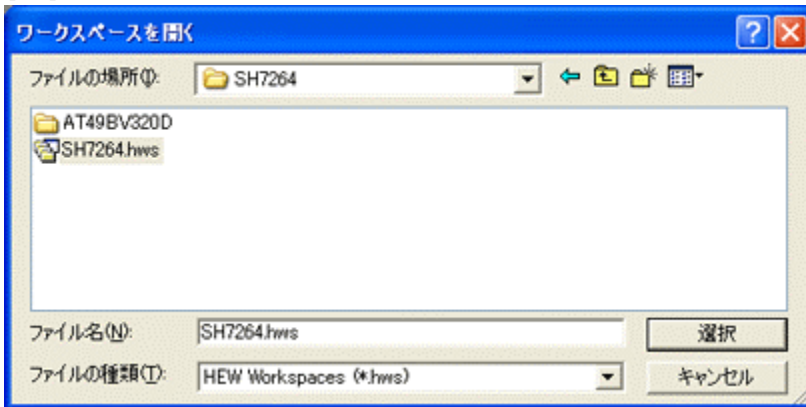
【機能】

1. H8SX/1651は、サンプルで「TC58FVM5T」の対応ソフトを用意してあります。(ルネサスCのみ対応)
2. SH7264は、サンプルで「AT49BV320D」の対応ソフトを用意してあります。(ルネサスCのみ対応)
3. HewにてFlashROMの品種追加が出来るよう対応する。
4. FlashROM仕様にあわせたセクターイレーズとバイト書き込みをプログラミングするだけで追加が可能になります。
5. FlashROM対応ソフトをターゲット側に流し込み、H-デバッガと通信させるためのポートがCPU品種ごとに相違があるため、品種別に対応しています。

【品種追加前の準備】

1. AH7000コントロールソフト (Ver 10. 10A) のインストールDIRにあるワークスペースを開きます。(SH7264での追加例)

[1-1]

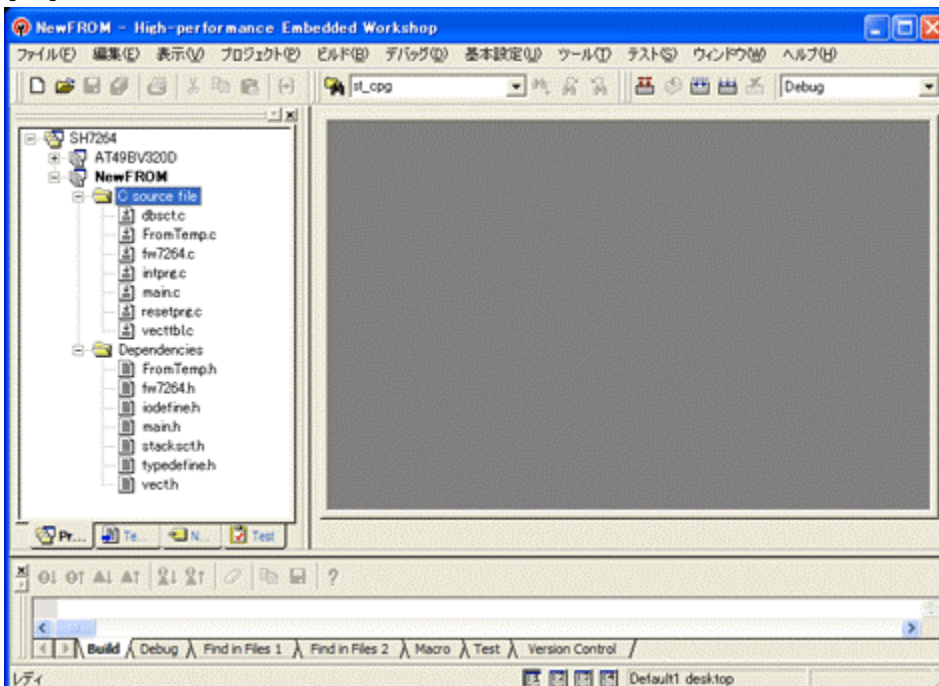


<デフォルトディレクトリ>

"c:\Program Files\Aone\DEF\rom-custom\SH7264"
になります。

2. プロジェクト名「NewFROM」をアクティブプロジェクトに設定します。

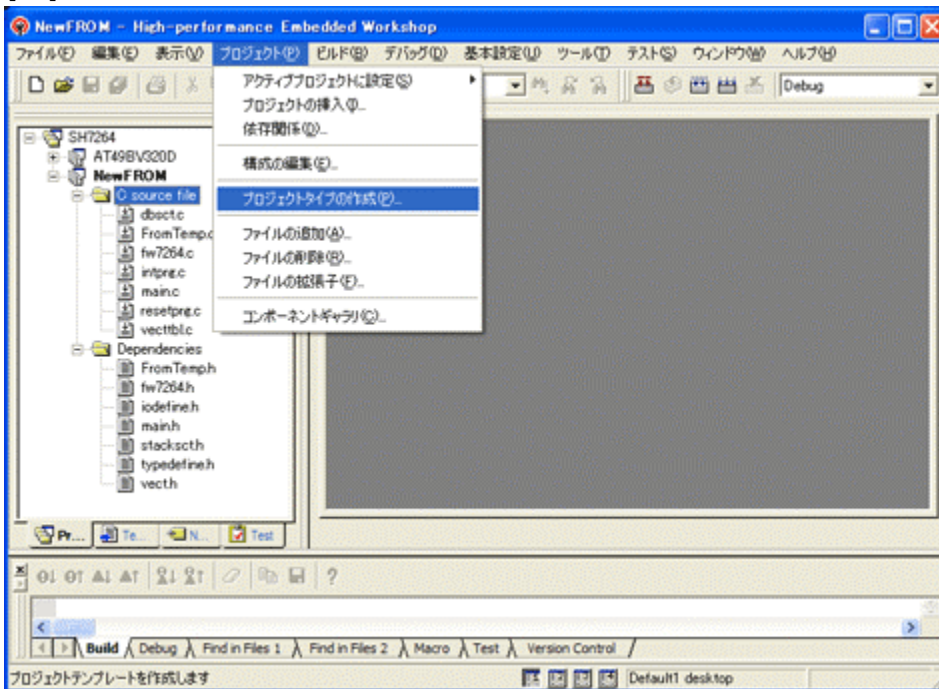
[1-2]



<NewFROM>をマウスクリックし、右クリックのポップアップメニューから選択します。

3. 「プロジェクトタイプの作成」をします。

[1-3]

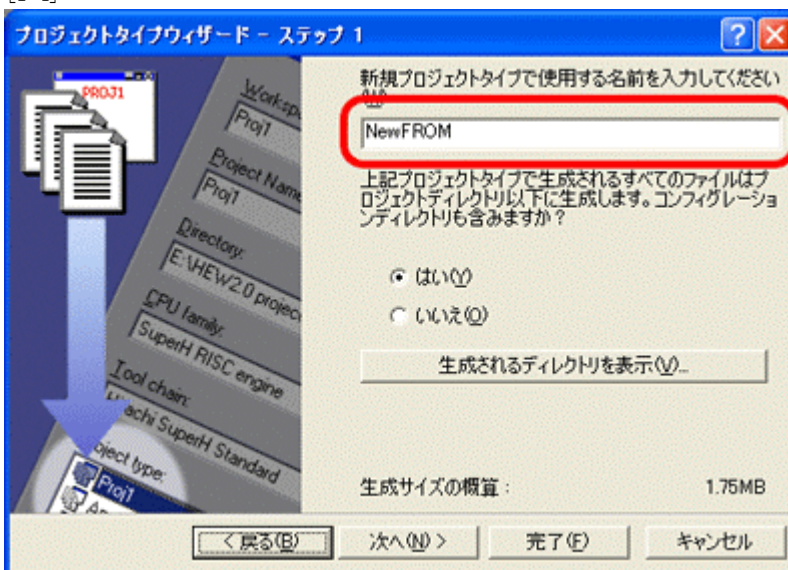


Hewメニュー

<プロジェクト>-<プロジェクトタイプの作成>をクリックします。

4. 新規プロジェクトタイプで使用する名前を指定します。

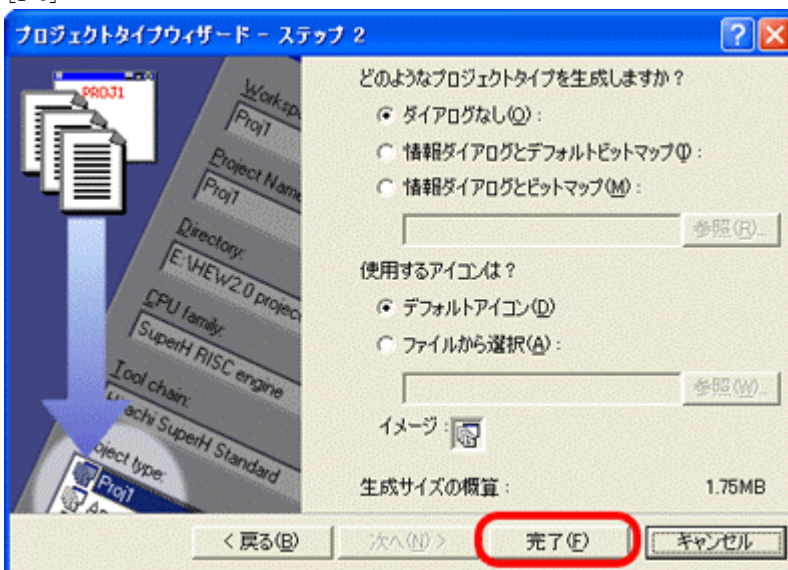
[1-4]



名前は、重複しないようにして下さい。他のMPU品種でも追加が必要な場合は、例として「NewFROM_7264」等が良いかもしれません。この説明では「NewFROM」としておきます。

<- 「次へ」をクリックします。

[1-5]



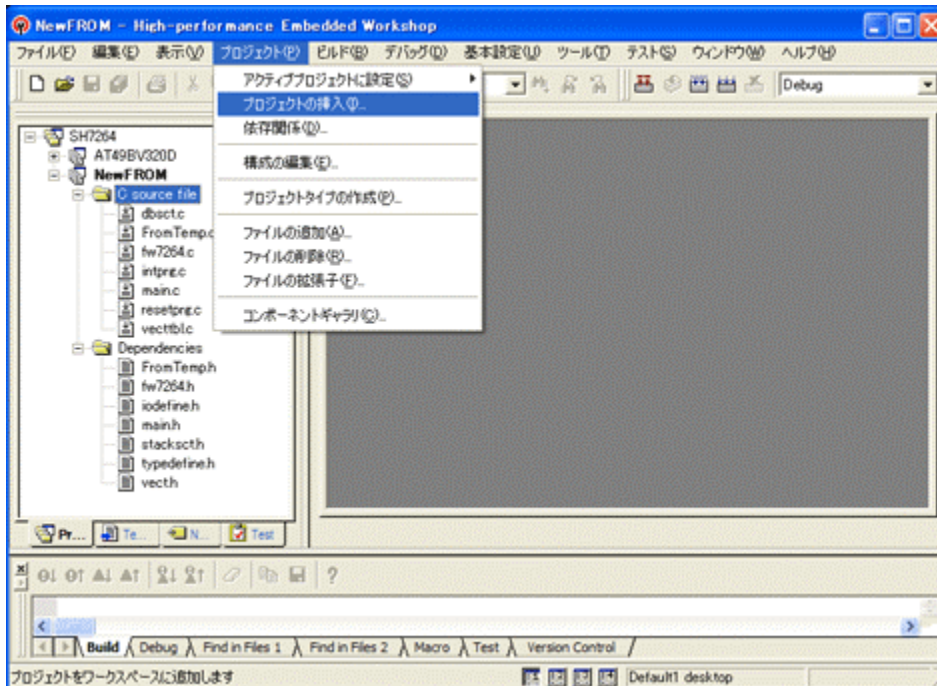
<-完了をクリックします。

この操作で「品種追加前の準備」は完了です。

【FlashROM品種の追加】

1. FlashROM品種を追加するため、「プロジェクトの挿入」をします。

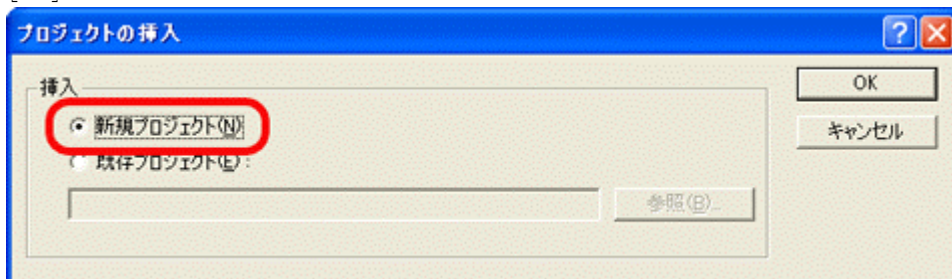
[2-1]



Hewメニュー

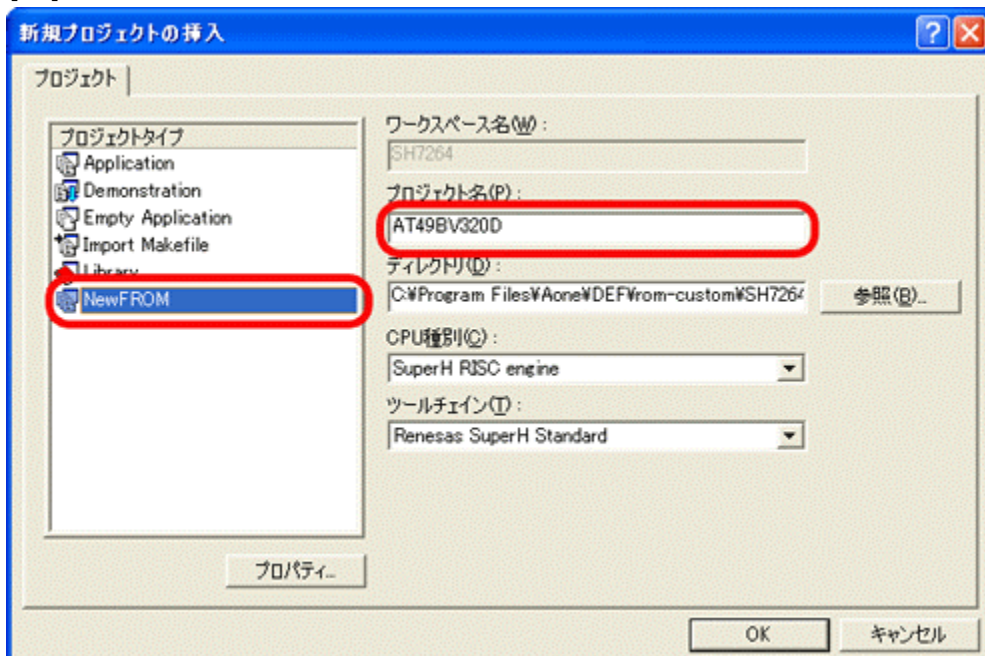
<プロジェクト>-<プロジェクトの挿入>をクリックします。

[2-2]



「新規プロジェクト」を指定して、「OK」をクリックします。

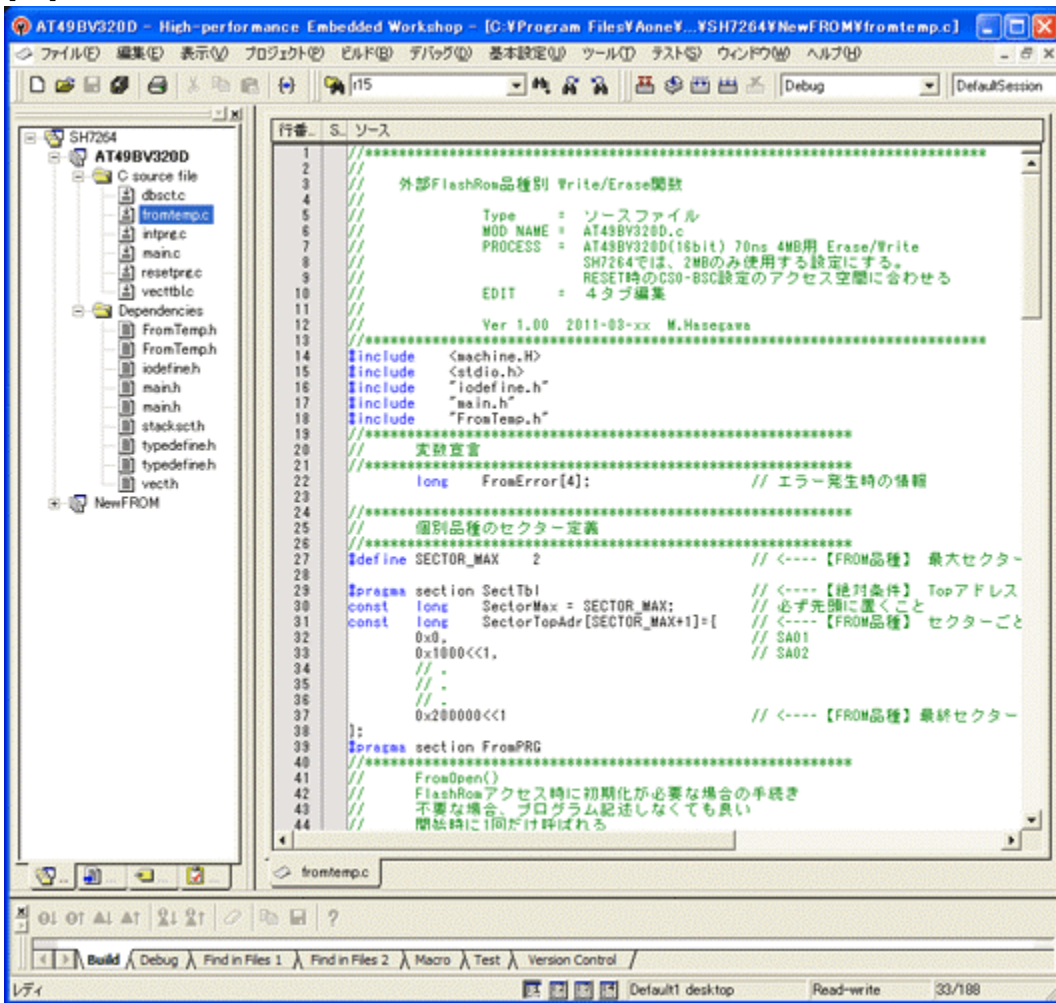
[2-3]



- 1) プロジェクトタイプを作成した「NewFROM」に指定します。
- 2) プロジェクト名を指定します。推奨としてはFlashROM名が良いかと思います。

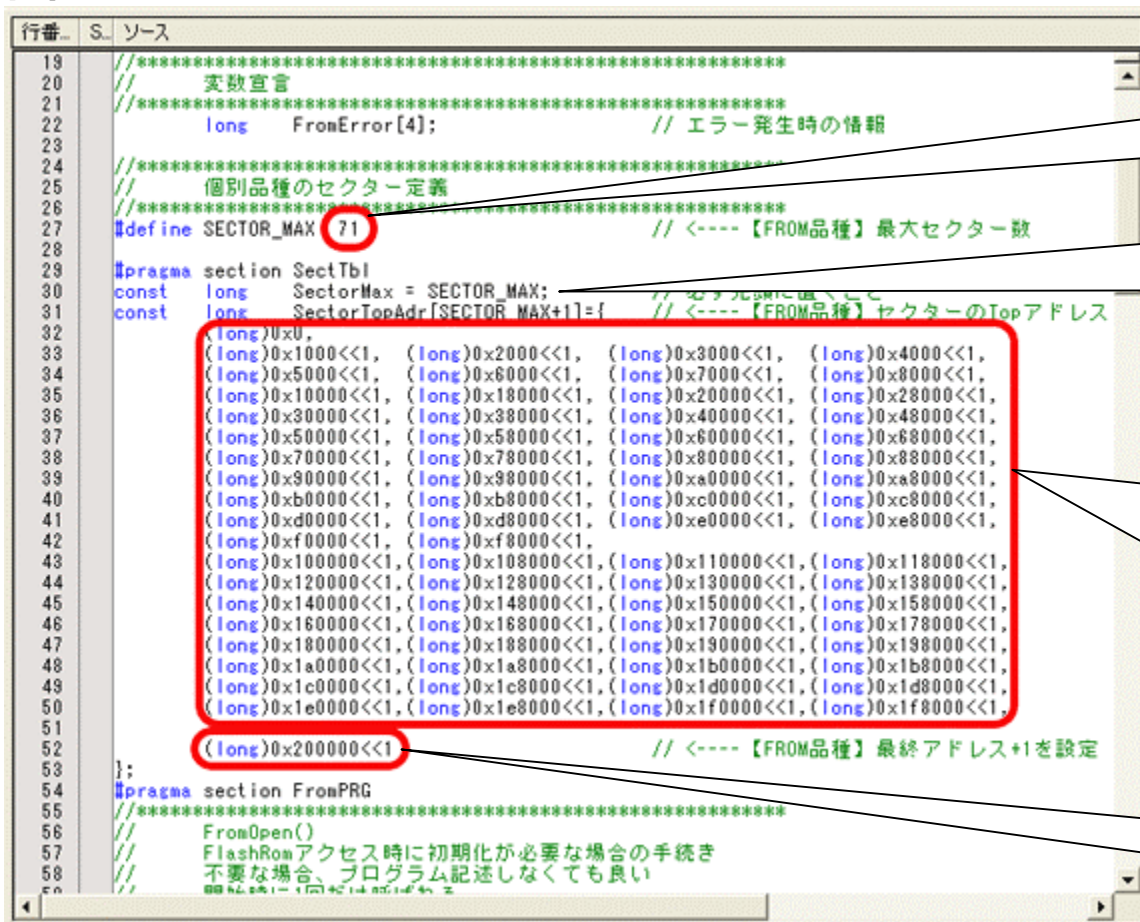
<- 「OK」をクリックします。

2. 新規プロジェクトに追加するFlashROM品種の定義およびプログラムを作成します。
[2-4]



品種追加用テンプレートファイル「FromTemp.c」を開きます。

- 1) 「FromTemp.c」に追加FlashROMのセクター情報を定義します。
[2-5]



「SECTOR_MAX」に使用するフラッシュROMのセクター(ブロック)数を定義します。

⚠ 変数宣言の順番は変更しないで下さい。データ管理上、最初にセクター(ブロック)数が入るルールになっています。

変数「SectorTopAdr[]」に、定義したセクター(ブロック)数ごとの先頭アドレスを定義します。
⚠ RCのバージョンによっては、キャストなしで記述をすると「short」に丸められますので「(long)0x1000<<1」とキャストすることを推奨します。

最後にフラッシュROMの最終アドレス+1したアドレスを定義します。

2) 「FromTemp.c」に追加フラッシュROMの「オープン」「クローズ」関数を作成します。
[2-6]

```

50  };
51  #pragma section FromPRG
52  //*****
53  // 【FROM品種】
54  // FromOpen()
55  // FlashRomアクセス時に初期化が必要な場合の手続き
56  // 不要な場合、プログラム記述しなくても良い
57  // 開始時に1回だけ呼ばれる
58  //*****
59  int FromOpen(void)
60  {
61      int i;
62      int stat;
63      Ushort *from; // Word Access
64
65      CPG.FROCR.WORD = 0x124; // デフォルト値
66
67      for(i = 0; i <= SectorMax-1; i++) {
68          from = (Ushort *)SectorTopAdr[i];
69          *from = 0x80; // Sector Unlock
70          *from = 0xd0;
71          stat = FullStatusCheck(from, 'D');
72          *from = 0xff; // Read
73          if (stat == NG) return(NG);
74      }
75      return(OK);
76  }
77  //*****
78  // 【FROM品種】
79  // FromClose()
80  // FlashRom書き込み処理が全て終了した場合に必要な手続き
81  // 不要な場合、プログラム記述しなくても良い
82  // 終了時に1回だけ呼ばれる
83  //*****
84  int FromClose(void)
85  {
86      return(OK);
87  }
88  //*****
89  // 【FROM品種】
90  // FromSectorEraseProc(char *cmd)
91  // 伝送フォーム(in)
92  // cmd[0] == %
93  // [1] == 0
94  // [2] == CommandSize[2]以降[Sum]も含む
95  // [3] == Command('D')
96  // [4] == Sector(0->255)
97  // [Sum] == [3]->[Sum-1]の加算
98  // return(out)
99  // n -- 正常終了

```

関数「FromOpen0」は、ターゲット RAM に、このプログラムがダウンロードされた時、最初に1回コール(Call)されます。このプログラム例は、全セクターをロック解除（アンロック）しています。必要無い場合は、「return(Ok);」のみ記述します。

関数「FromClose0」は、フラッシュ ROM に全データ書き込み終了後の最後に1回コール(Call)されます。ソフトウェアロックが必要な場合は、この関数にプログラムして下さい。必要無い場合は、「return(Ok);」のみ記述します。

3) 「FromTemp.c」に追加フラッシュROMの「セクターイレーズ」関数を作成します。
[2-7]

```

98  }
99  //*****
100 // FromSectorEraseProc(char *cmd)
101 // 伝送フォーム(in)
102 // cmd[0] == %
103 // [1] == 0
104 // [2] == CommandSize[2]以降[Sum]も含む
105 // [3] == Command('D')
106 // [4] == Sector(H) MAX(1024)
107 // [5] == Sector(L)
108 // [Sum] == [3]->[Sum-1]の加算
109 // return()
110 // OK == 正常終了
111 // NG == 異常終了
112 //*****
113 int FromSectorEraseProc(char *cmd)
114 {
115     Ushort *from; // Word Access
116     short sector;
117     int stat;
118
119     sector = (cmd[4] << 8) & 0xff00;
120     sector |= cmd[5] & 0xff;
121     if (sector < SectorMax) {
122         from = (Ushort *)SectorTopAdr[sector];
123         *from = 0x20;
124         *from = 0xd0;
125         stat = FullStatusCheck(from, 'D');
126         *from = 0xff; // Read
127         if (stat == OK) return(OK);
128     }
129     return(NG);
130 }
131 //*****

```

関数「FromSectorEraseProc(char *cmd)」には、セクターごとのイレーズプログラムを記述します。デバッガとの通信完了後、サムチェック正常の場合、この関数がコール(Call)されます。(サム異常時はコールされません)

<引数の仕様>
char cmd[];
cmd[0] == '%' // ヘッダー
cmd[1] == 0 // 予備
cmd[2] == 4 // コマンドサイズ cmd[3]->[Sum]までのサイズ
cmd[3] == 'D' // コマンド
cmd[4] == 0xn // 消去するセクター番号のH数 最大HIGH(1024)
cmd[5] == 0xn // 消去するセクター番号のL数 最大LOW(1024)
cmd[6] == 0xn // サム cmd[3]->[5]の加算値

<備考>
全イレーズ処理にしたい場合は、セクター番号ゼロ「0」のときのみ実施して、他のセクターの場合は、「return(Ok);」にすれば代用できます。

4) 「FromTemp.c」に追加フラッシュROMの「バイト/ワードプログラム (書き込み)」関数を作成します。
[2-8]

```

131 //*****
132 //      FromWriteProc(char *cmd)
133 //      伝送フォーム(in)
134 //      cmd[0] == %
135 //      [1] == 0
136 //      [2] == CommandSize[2]以降[Sum]も含む
137 //      [3] == Command('W')
138 //      [4] == WriteAddress(HH)
139 //      [5] == WriteAddress(MH)
140 //      [6] == WriteAddress(ML)
141 //      [7] == WriteAddress(LL)
142 //      [8+0] == WriteData[0]
143 //      .
144 //      ==
145 //      [8+127] == WriteData[127] 固定 余分エリア(
146 //      [Sum] == [3]->[Sum-1]の加算
147 //      return()
148 //      OK == 正常終了
149 //      NG == 異常終了
150 //*****
151 int FromWriteProc(char *cmd)
152 {
153     Ushort *from; // Word Access
154     Ushort *verf; // Word Access
155     Ushort *data;
156     int i;
157     int stat;
158
159     from = (Ushort *){ // Address set
160         (((long)cmd[4] << 24) & 0xff000000) |
161         (((long)cmd[5] << 16) & 0x00ff0000) |
162         (((long)cmd[6] << 8) & 0x0000ff00) |
163         ((long)cmd[7] & 0x000000ff)
164     };
165     verf = from; // Verify
166     data = (Ushort *)&cmd[8]; // Data Adr set
167
168     for(i = 0; i < BLOCK/2; i++){ // Word Write
169         *from = 0x40;
170         *from = data[i];
171         stat = FullStatusCheck(from, 'W');
172         if (stat == NG) return(NG);
173         ++from;
174     }
175     verf[0] = 0xff; // Read
176     for(i = 0; i < BLOCK/2; i++){ // VerifyTest
177         if (verf[i] != data[i]) { // VerifyError
178             FromErrorSet((long)'R', (long)&verf[i], (long)data[i]);
179             return(NG);
180         }
181     }
182     return(OK);
183 }
184 //*****

```

関数「FromWriteProc(char *cmd)」には、128バイト(64ワード)ごとの書き込みプログラムを記述します。デバッガから書き込みデータ 128バイト(64ワード)固定でデータの受信完了後、サムチェック正常の場合、この関数がコール(Call)されます。(サム異常時はコールされません)

<引数の仕様>

```

char cmd[];
cmd[0] == '%' // ヘッダー
cmd[1] == 0 // 予備
cmd[2] == 134 // コマンドサイズ cmd[3]->[Sum]までのサイズ
cmd[3] == 'W' // コマンド
cmd[4] == 0xn // 書き込みアドレス(HH)
cmd[5] == 0xn // 書き込みアドレス(MH)
cmd[6] == 0xn // 書き込みアドレス(ML)
cmd[7] == 0xn // 書き込みアドレス(LL)
cmd[8] == 0xn // 書き込みデータ[0]
"
"
cmd[135] == 0xn // 書き込みデータ[127] 固定 余分エリアは(0xff)
cmd[136] == 0xn // サム cmd[3]->[135]の加算値

```

<備考>

このプログラム例は、128バイトの書き込み終了後、バリファイテストも実施しています。

5) 「FromTemp.c」に追加フラッシュROMの「フルステータスチェック」関数を作成します。
[2-9]

```

184 //*****
185 //      FullStatusCheck() // Word Access
186 //      フルステータスチェックエラー発生時は、エラー情報
187 //      を[FromError]に残す
188 //      FromError[0] == command 'W'or'D'or'E' or '0'==0pen
189 //      [1] == アクセスしたアドレス
190 //      [2] == FROM ステータス
191 //      return()
192 //      OK == 正常終了
193 //      NG == 異常終了
194 //*****
195 int FullStatusCheck(Ushort *adr, char cmd)
196 {
197     FromErrorSet(0,0,0); // Error情報を消去
198     while((*adr & SR7) == 0){ // Wait Ready
199         if(*adr & (SR1 | SR3 | SR4 | SR5)){ // Error
200             FromErrorSet((long)cmd, (long)adr, (long)*adr);
201             return(NG);
202         }
203     }
204     return(OK);
205 }
206 //*****

```

関数「FullStatusCheck(Ushort *adr, char cmd)」には、フラッシュROM特有のステータスチェックプログラムを記述します。この関数は、上記の作成関数からのみコール(Call)されます。よって、内部処理は自由に記述して下さい。

<引数の仕様>

```

Ushort *adr; // 処理しているフラッシュROMのアドレス
char cmd; // 処理しているコマンド
// "O" = オープンコマンド
// "C" = クローズコマンド
// "D" = イレーズコマンド
// "W" = 書き込みコマンド
// "R" = バリファイコマンド

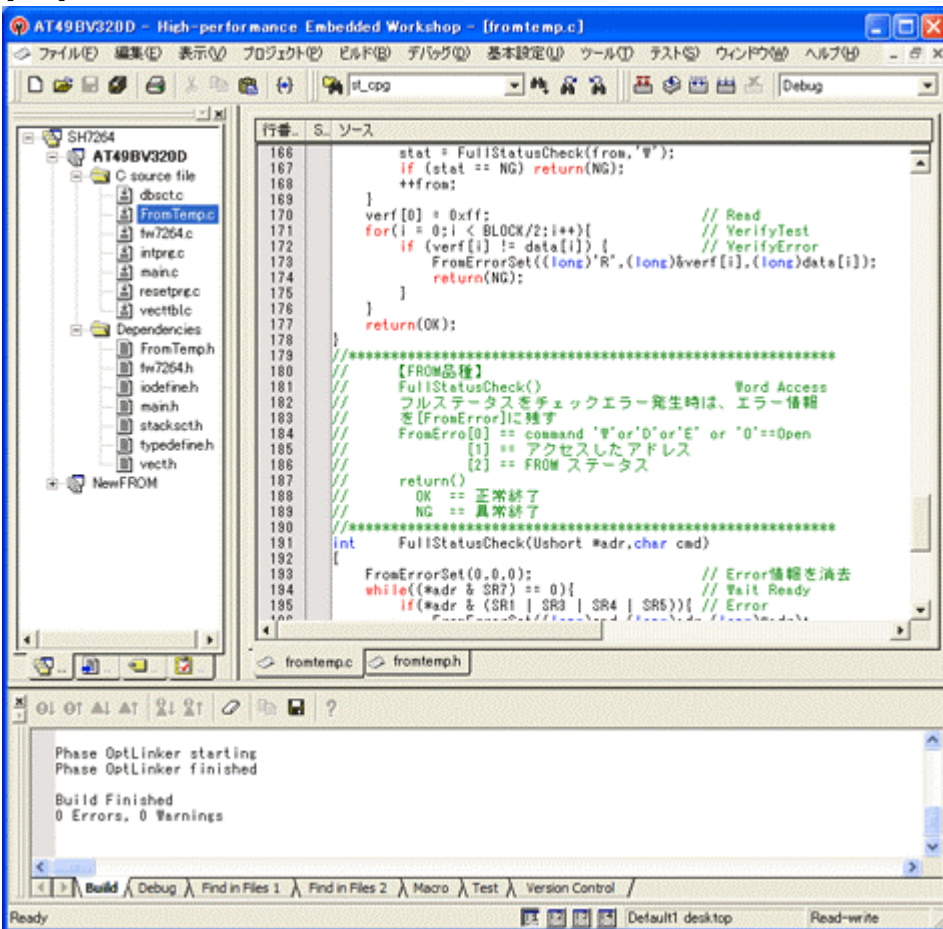
```

<備考>

関数「FromErrorSet(.)」は、関数デバッグ時のエラー情報を見るための一例としての関数です。仕様に関してはルールがありませんので、自由に作成して下さい。

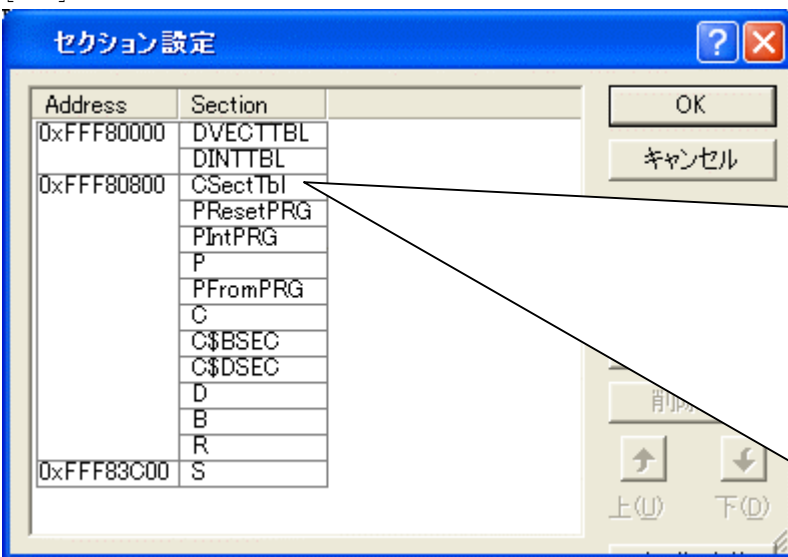
以上で、関数の作成は終了です。

6) 新規プロジェクトのFlashROMプログラムをビルドします。
[2-10]



Hewメニュー
<ビルド>-<すべてをビルド>
で、「0 Errors 0 Warnings」になったことを確認します。

7) 新規プロジェクトのFlashROMプログラム作成上のルール
[2-11]



<ルール1>
セクター情報定義のセクション名「SectTbl」の、ロケートは必ず、実行プログラムアドレス(TopAdr)の「+0x800」に割付けて下さい。

<ルール2>
セクション「SectTbl」のデータ配置にルールがあります。
const long SectorMax; // セクター数
const long SectorTopAdr[SectorMax+1]; // セクター毎 Top アドレス
この順番に配置されることが条件になります。

<ルール3>
最大セクター(ブロック)数は、「1024」です。

<ルール4>
スタックまで含めたオブジェクトサイズは「0x4000」16KB までです。

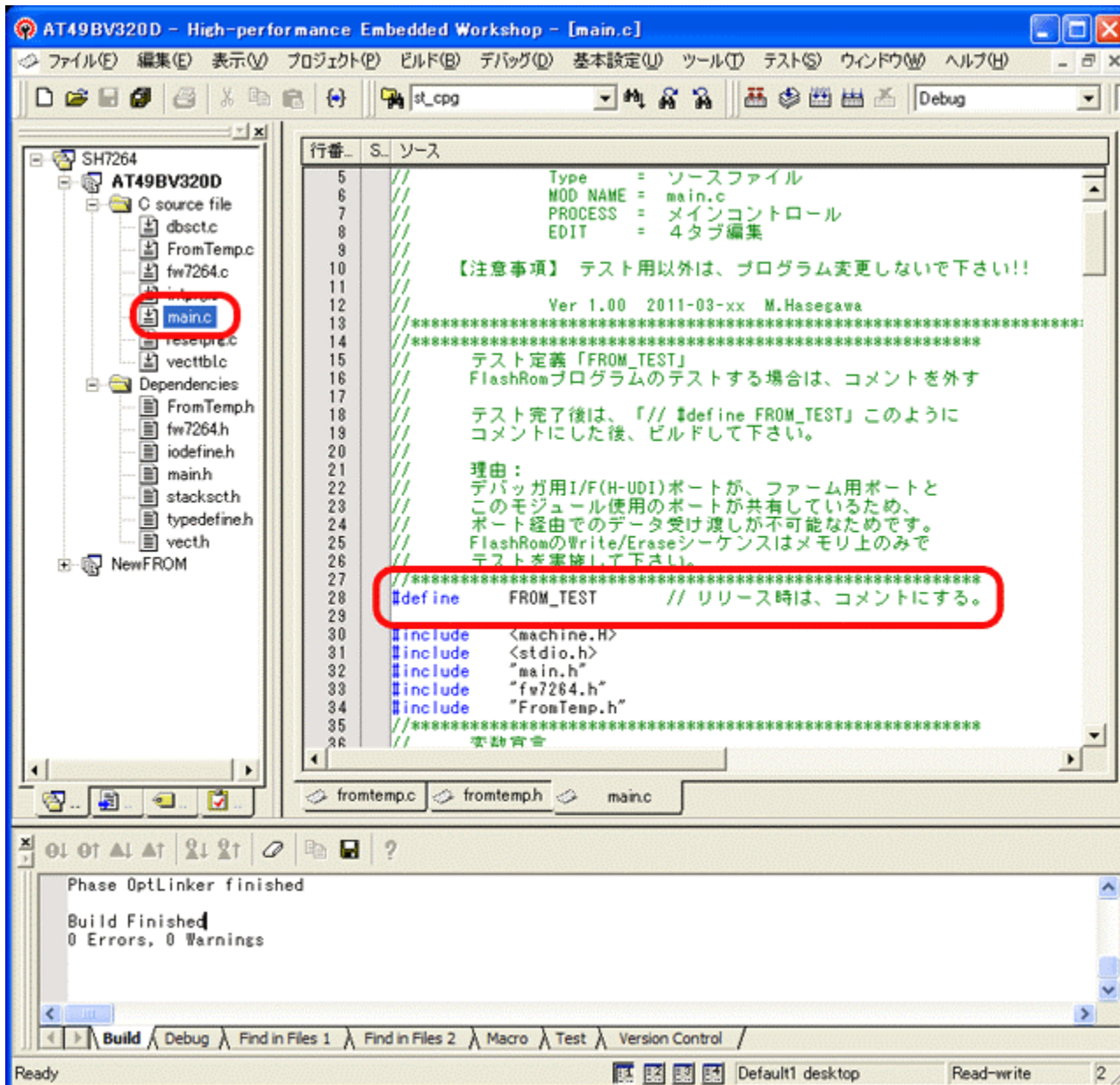
<ルール5>
#define OK 0 // 変更不可
#define NG 0xee // 変更不可
数値変更しないで下さい。

<ルール6>
下記4関数は、名称・引数・帰値等の仕様変更は不可です。
1) int FromOpen(void);
2) int FromClose(void);
3) int FromSectorEraseProc(char *cmd);
4) int FromWriteProc(char *cmd);

以上のルールは厳守して下さい。

【作成したFlashROMプログラムのデバッグ方法】

1. Hewにてデバッグの準備をします。
[3-1]



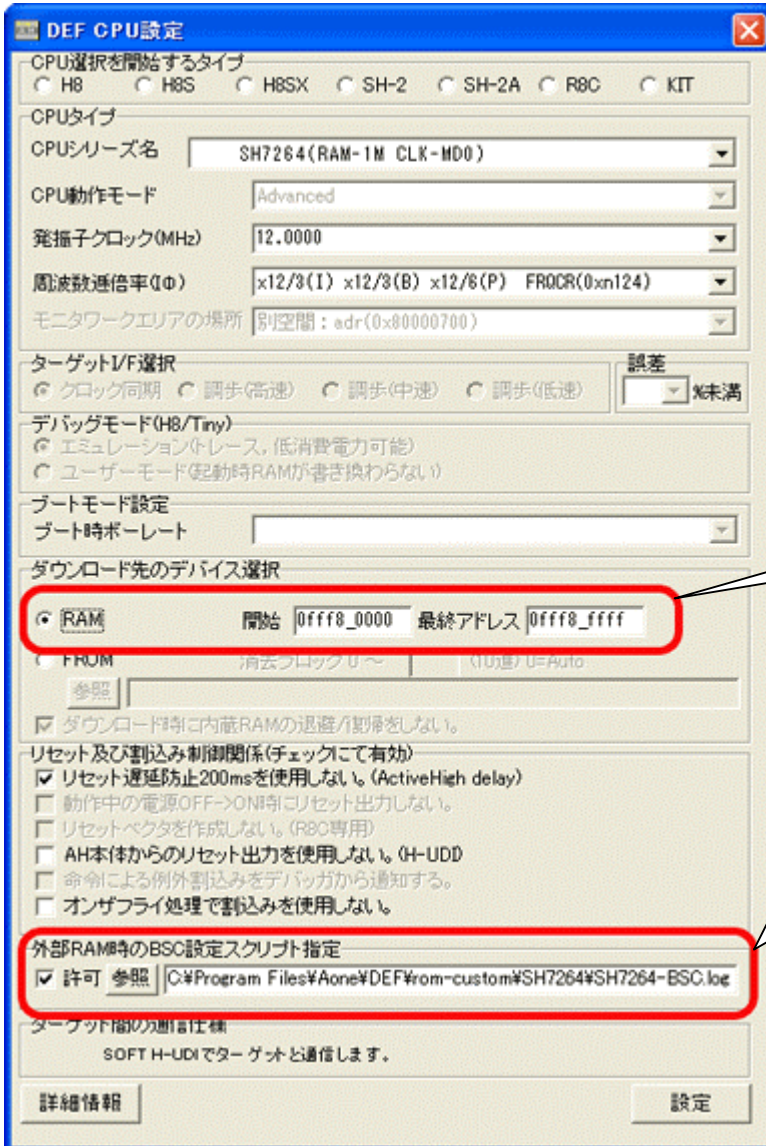
1) モジュール「main.c」の「#define FROM_TEST」のコメントを外します。

2) Hewメニューの<ビルド>-<ビルド>を指示します。

3) 「0 Errors 0 Warning」を確認します。

- 4) デバッガ使用の通信ポートと、このFlashROMプログラム使用の通信ポートと兼用させているため、通常のデバッグ操作でのデバッグは出来ません。よって、上記「#define FROM_TEST」のコメントを外すことにより、通信ポートを使用せず、内部メモリ操作のみで各関数のテストできるようにテスト用プログラムを用意しました。

2. デバッガ用コントロールソフト「DEF」にてデバッグする為の設定をします。
[3-2]



<CPU設定>

作成した「FlashROM」プログラムをターゲット側の内部RAMに転送して実行させますので、「RAM」にチェック後、先頭と最終アドレスを指定します。

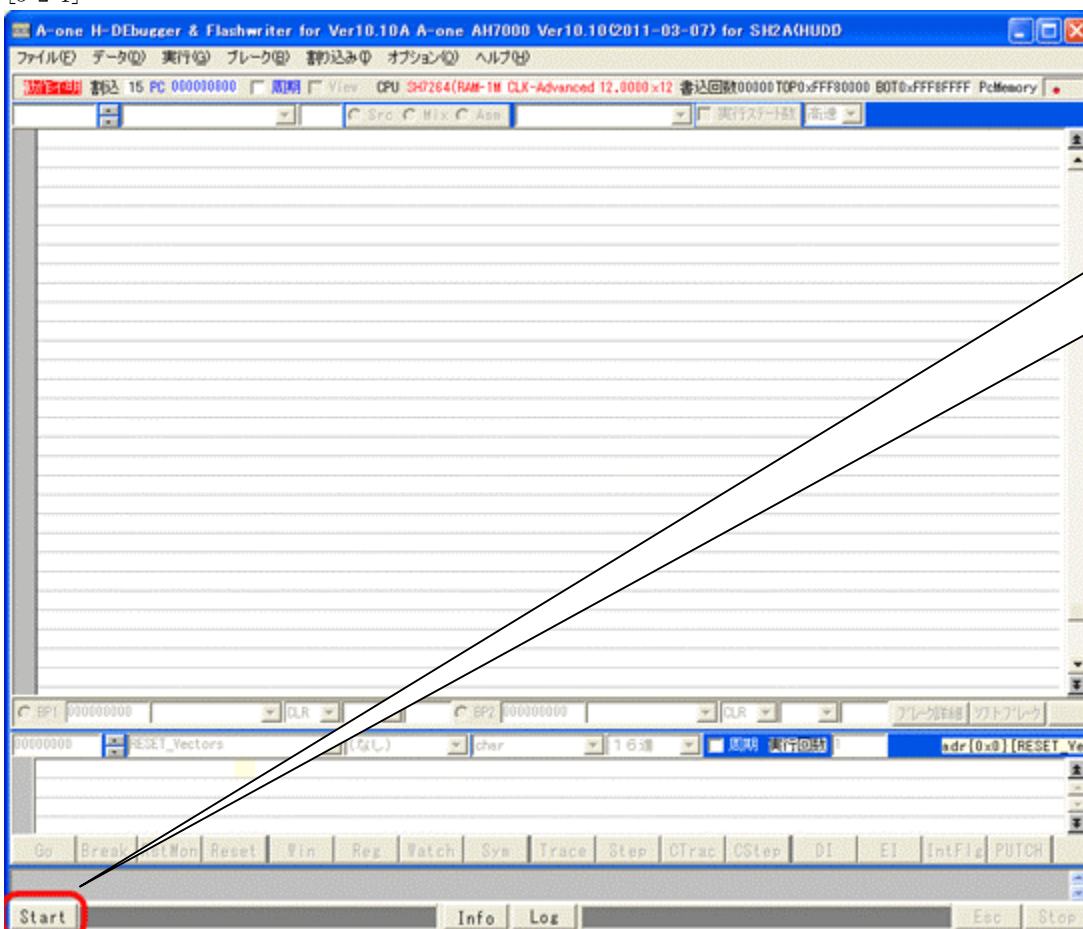
SH7264の場合
開始 0xffff_0000 最終 0xffff_ffff
になります。

作成した「FlashROM」プログラムのデバッグにBSC設定が必要な場合は、スクリプトファイルを指定します。

SH7264の場合
インストールディレクトリ
"c:\Program Files\A-one\DEF\rom-custom\SH7264"
に、例として「SH7264-BSC.log」が用意してありますので、目的ハードにカスタマイズして下さい。

<- 「設定」をクリックします。

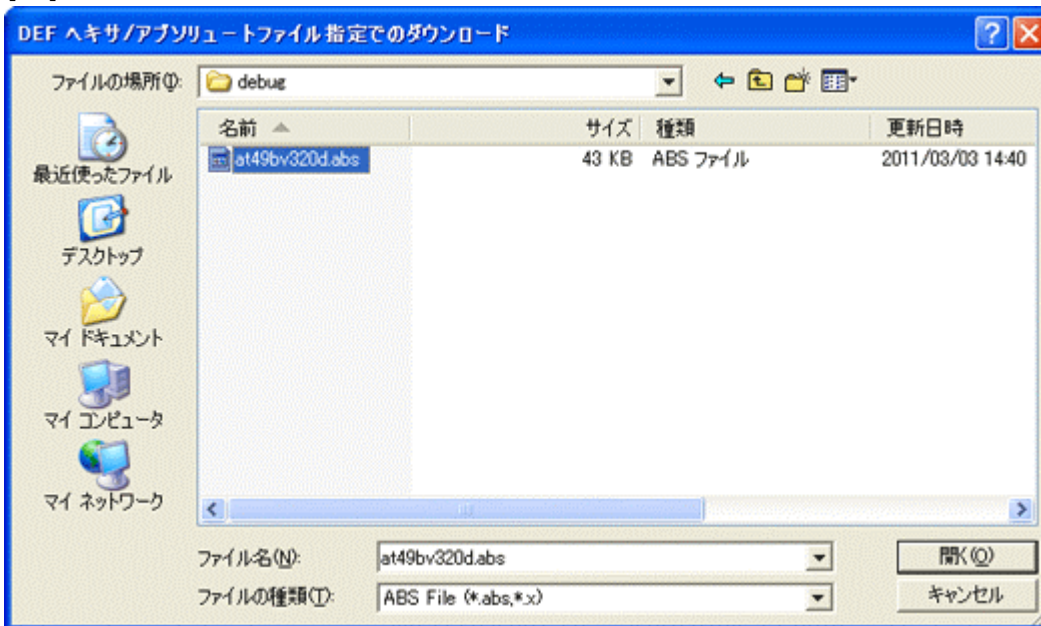
[3-2-1]



DEF画面、左下隅の「Start」をクリックします。

3. 作成したFlashROMソフトのデバッグを開始する準備をする。

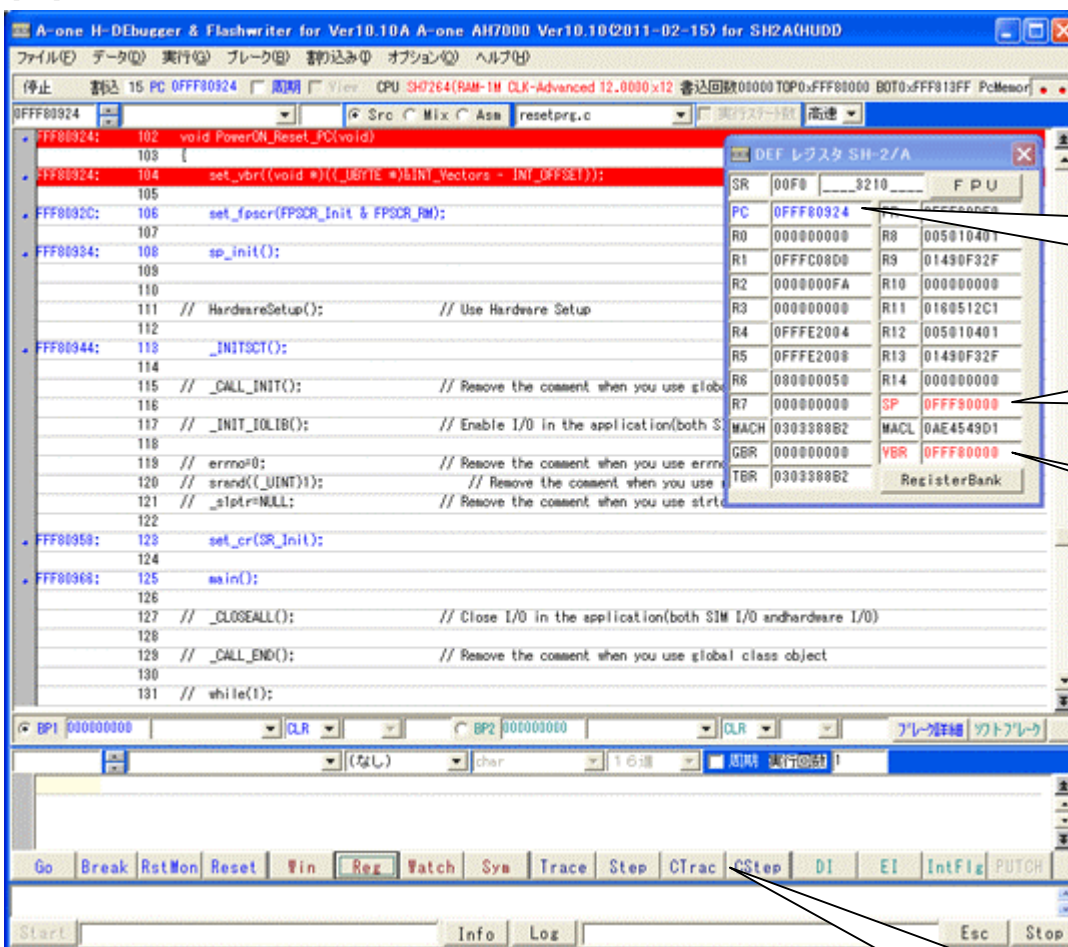
[3-3]



DEFメニュー
 <ファイル>-<ダウンロード>
 で、ダウンロードします。

インストールディレクトリ
 "c:\Program Files\Aone\DEF\rom-custom\SH7264"
 下の"ProjectName\Debug"
 に作成したアブソリュートファイルがありますので指定し
 ます。
 (例 ProjectName:AT49BV320D)

[3-4]



<ダウンロードが成功した初期画面>

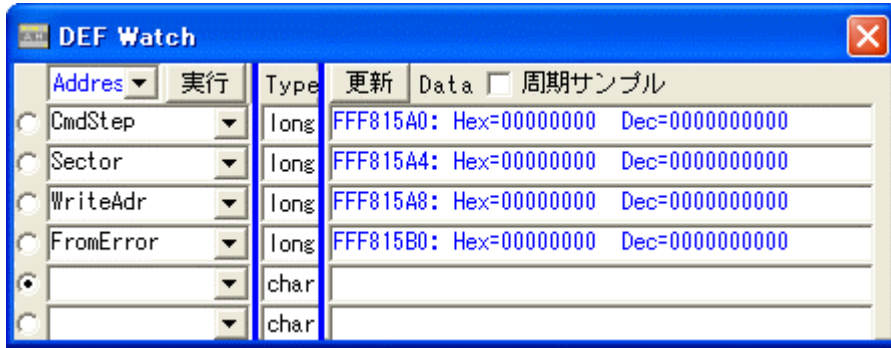
PCレジスタ値が
 「PowerON_Reset_PC0」関数の
 先頭アドレスになっていることが
 確認出来ます。

SPレジスタ値が内蔵RAMのボト
 ムアドレスになっていることが確
 認できます。

VBRレジスタ値が内蔵RAMのト
 ップアドレスになっていることが確
 認できます。

<操作>
 「CStep/CTrac」ショートPBをクリックして、
 関数「TestMain0」まで進めます。

[3-6-1]



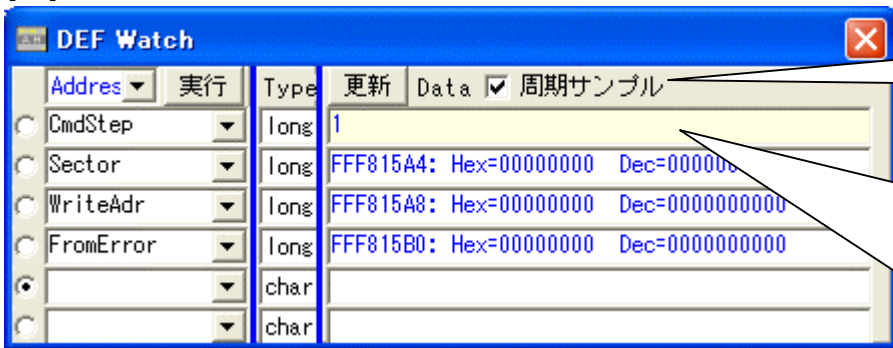
デバッグを進めるため、Watch 画面に変数を登録します。

- 1) CmdStep 関数「CmdWaitT」のコントロールステップ変数
- 2) Sector セクターイレースの進行カウンター
- 3) WriteAdr FROM 書き込み中アドレス
- 4) FromError エラー発生時情報

以上、4変数を登録します。

4. セクターイレーズ関数「FromSectorEraseProc(char *cmd)」をデバッグします。

[3-7]

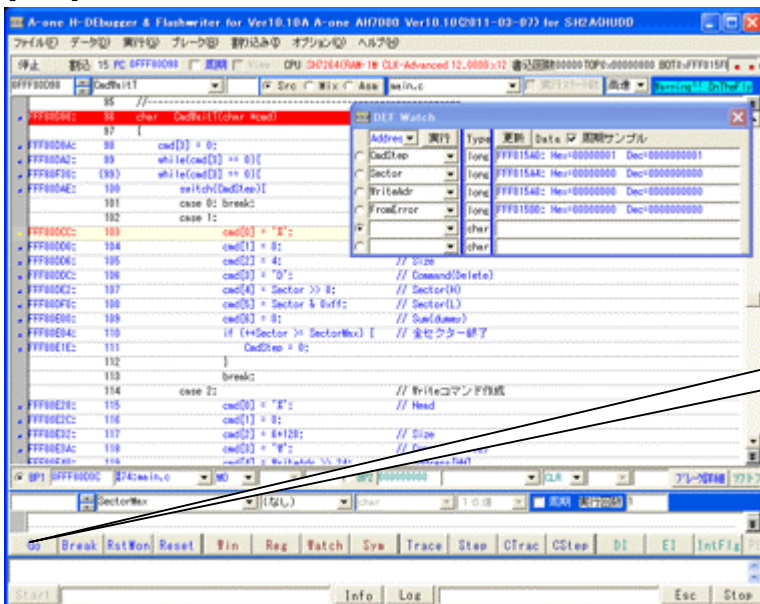


<操作1>
プログラム進行を確認するため、「周期サンプル」をチェックします。

<操作2>
変数「CmdStep」を数値「1」にします。
[Enter][1][Enter]で変更できます。

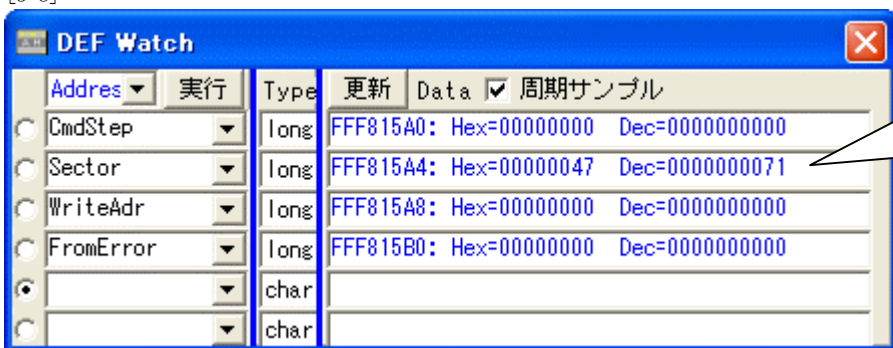
<備考>
関数「CmdWaitT」のソースを見てもらえれば理解できるかと思いますが、「CmdStep」を「1」にしますと、メモリー上でコマンドデータを作成して関数「FromSectorEraseProc(char *cmd)」に渡す仕組みになっています。
全て正常終了しますと、登録された全セクターをイレーズした後、変数「CmdStep」が数値「0」になります。

[3-7-1]



<操作3>
「Go」ショートPBをクリックします。

[3-8]



セクターイレーズが正常に動作していると、変数「Sector」が、ゼロ「0」から登録セクター数までインクリメントしていきます。
最終セクターまで正常終了しますと、変数「CmdStep」がゼロ「0」になります。

異常終了しますと、[3-5]で設定したブレークポイントで停止します。

[3-9]

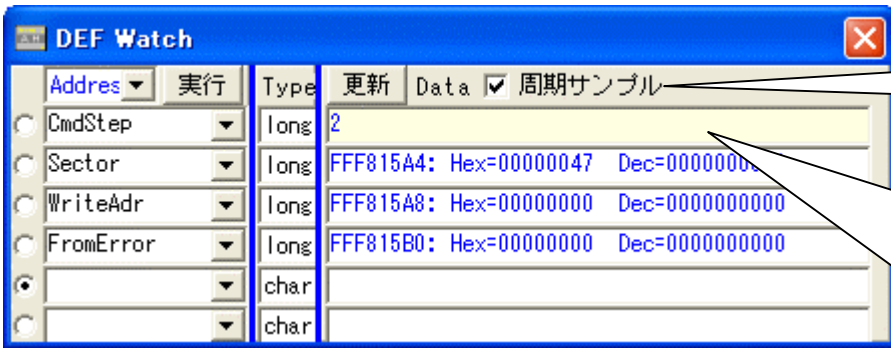


<ダンプ画面>

イレーズされているかダンプ画面で確認します。

5. 書き込み関数「FromWriteProc(char *cmd)」をデバッグします。

[3-10]



<操作1>
プログラム進行を確認するため、「周期サンプル」をチェックします。

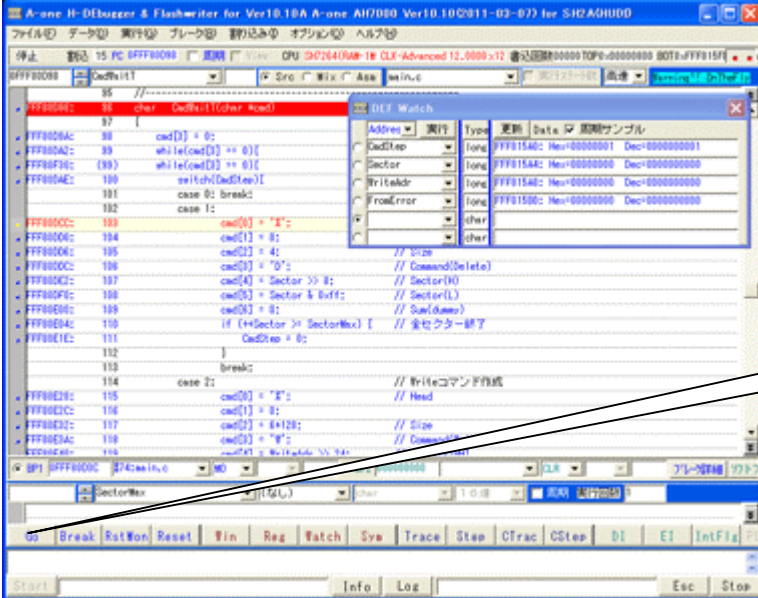
<操作2>
変数「CmdStep」を数値「2」にします。
[Enter][2][Enter]で変更できます。

<備考>
関数「CmdWaitT」のソースを見てもらえれば理解できるかと思いますが、「CmdStep」を「2」にしますと、メモリー上でコマンドデータを作成して関数「FromWriteProc(char *cmd)」に渡す仕組みになっています。

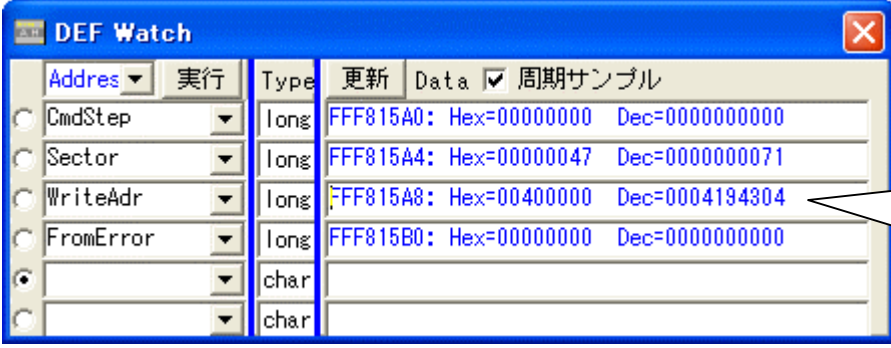
全て正常終了しますと、全エリア書き込み後、変数「CmdStep」が数値「0」になります。

<操作3>
「Go」ショートPBをクリックします。

[3-7-1]



[3-11]



書き込みが正常に動作していると、変数「WriteAdr」が、ゼロ「0」から最終アドレスまで「0x80」ごとに加算していきます。最終アドレスまで正常終了しますと、変数「CmdStep」がゼロ「0」になります。

異常終了しますと、[3-5]で設定したブレークポイントで停止します。

[3-12]



<ダンプ画面>

正しくデータが書き込まれたかダンプ画面で確認します。

ゼロ番地以外は、0x80番地ごとに先頭のアドレス位置をASCII文字データを書き、残りは、ゼロから始まるパターンを+1ごとに埋めています。なお、ゼロ番地から8バイト分は、PC/SPレジスタの初期データになりますので、誤動作防止のため[0xff]にしています。

5. その他関数「FromOpen(void)/FromClose(void)」が必要な場合は、必要に応じてデバッグして下さい。

1) 関数「FromOpen(void)」

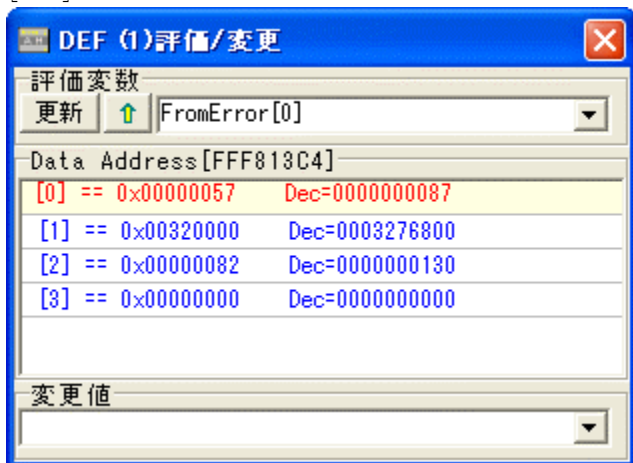
テスト用メイン関数「TestMain0」の60行でコール(Call)しています。

2) 関数「FromClose(void)」

テスト用関数「CmdWaitT(char *cmd)」で、コントロールステップ変数「CmdStep」を「3」以上の数値をセットしますとコール(Call)されます。

6. 異常終了時のエラー情報「long FromError[4)」の参照

[3-12]

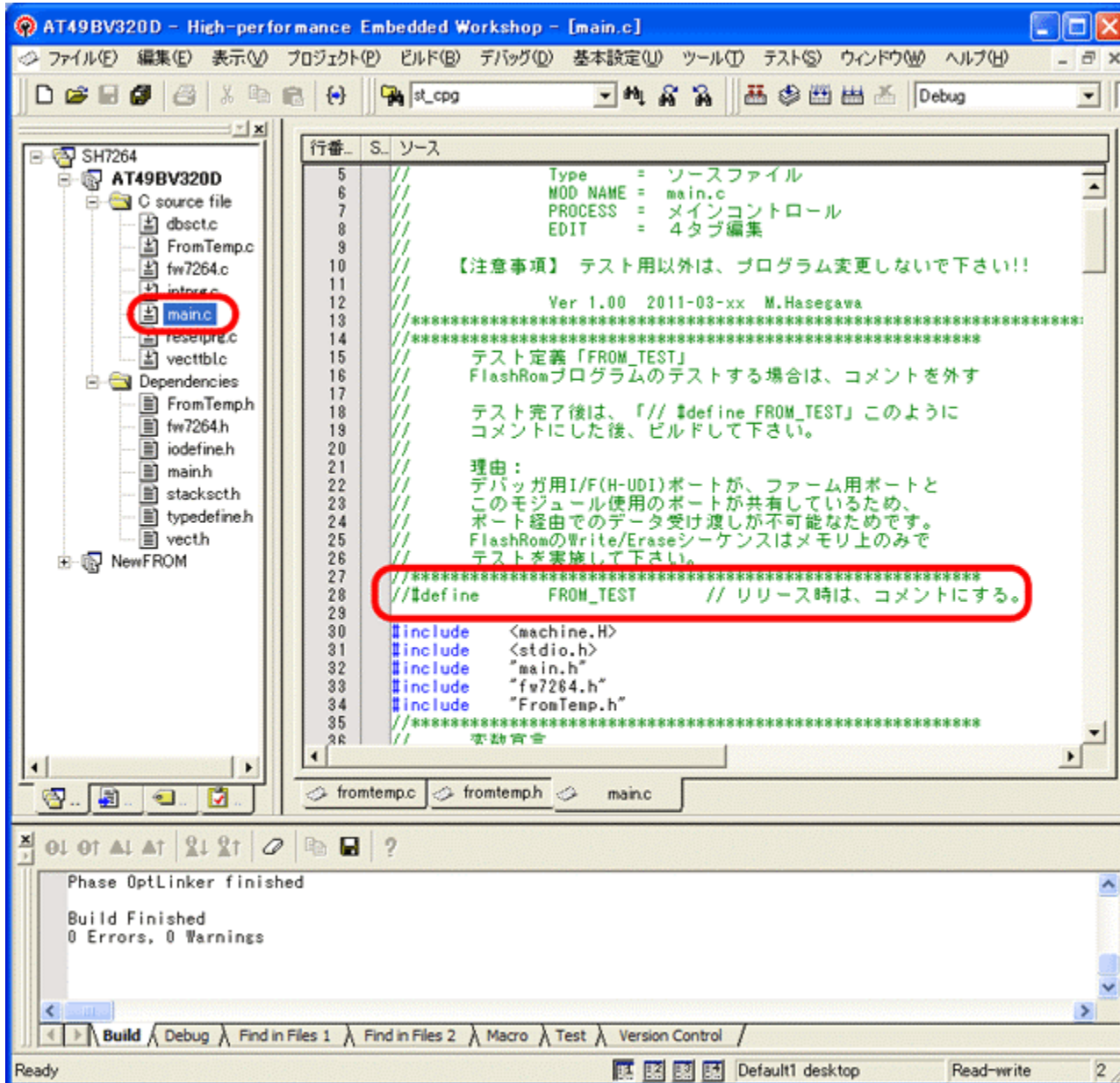


<評価・変更窓>

エラー発生にて異常終了した場合は、変数「FromError[4)」に情報が残りますので、プログラム修正の参考にして下さい。なお、この変数の仕様および名称等に規約はありませんので、自由に変更しても構いません。

【作成したFlashROMプログラムを正規リリース登録する】

1. FlashROMプログラムのデバッグが終了しましたら、Hewにて再コンパイルします。
[4-1]



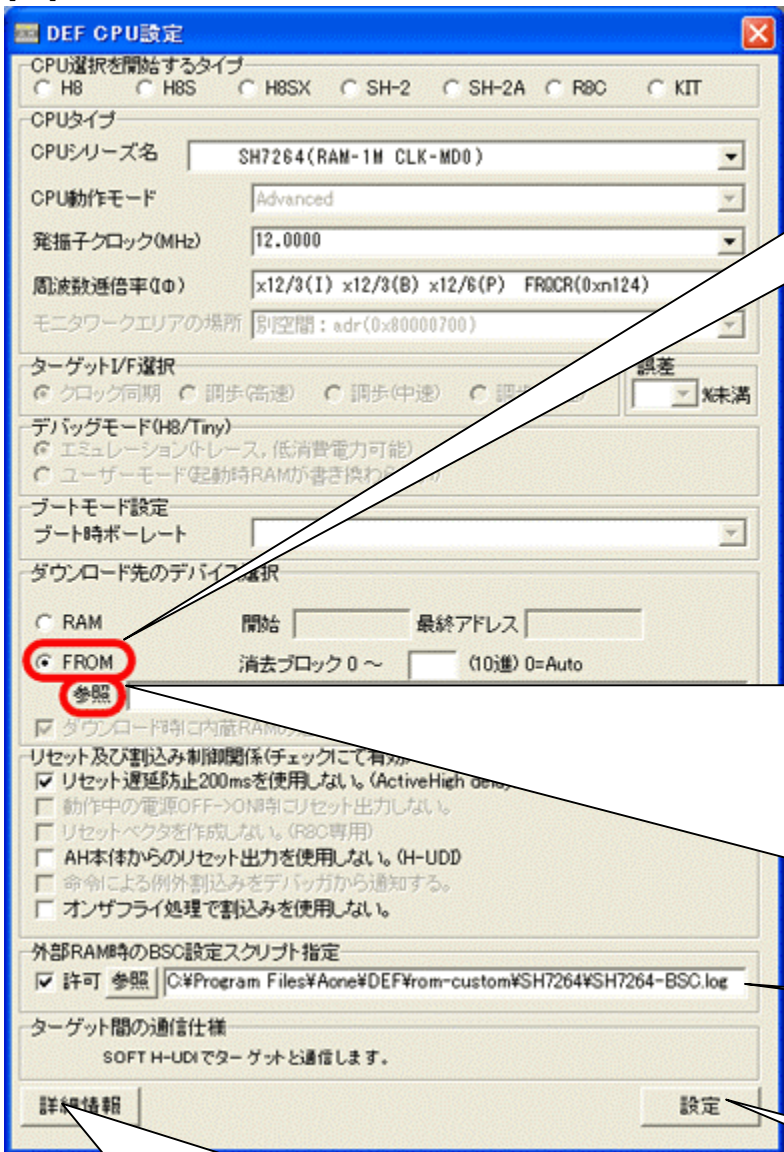
1) モジュール「main.c」の「// #define FROM_TEST」をコメントします。

2) Hewメニューの<ビルド>-<ビルド>を指示します。

3) 「0 Errors 0 Warning」を確認します。

2. デバッグ用コントロールソフト「DEF」にFlashROMプログラムの登録をします。

[4-2]

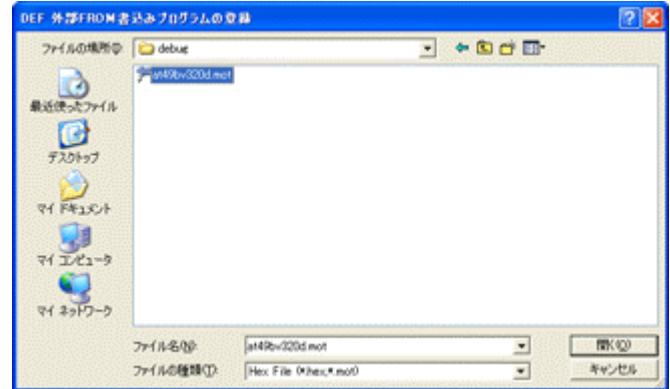


<CPU設定画面>

<操作1>
FROM側に「チェック」します。

<操作2>
「参照」ボタンをクリックします。

[4-3]



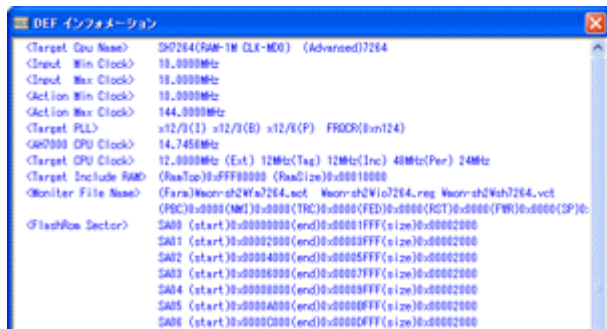
新規作成したFlashROMプログラムのHEXファイル「Project.mot」を指定します。

⚠️ ダウンロード時に使用するRAMエリアの退避/復帰はできません。

⚠️ FlashROMにWriteする動作をさせるためにBSC設定が必要なCPU品種の場合は、スクリプトファイルを登録して下さい。

<操作3>
「詳細情報」ボタンをクリックしますと、<インフォメーション画面>に内部登録したセクターごとのトップアドレス情報を見ることができます。

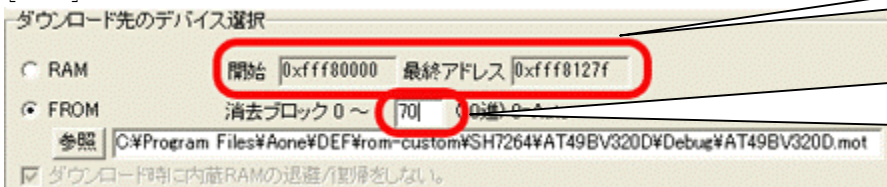
[4-5-1]



<操作4>
最後に「設定」をクリックします。

FlashROMプログラムの先頭と最終アドレスを表示します。

[4-4-1]

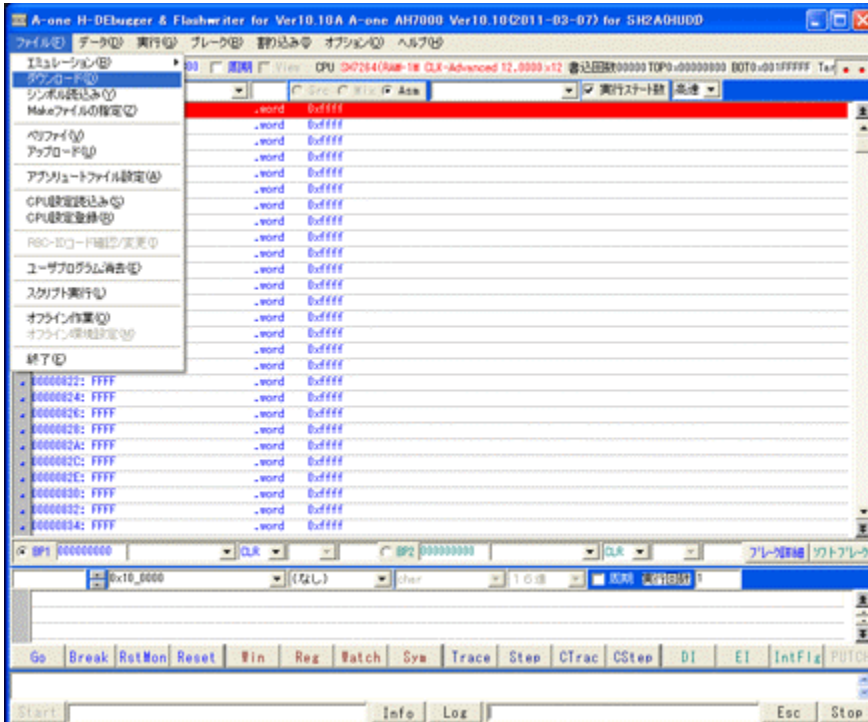


FlashROMプログラムに登録した最終セクター数を表示します。なお、登録時にここをゼロ「0」に設定しますと、ダウンロードするオブジェクトの大きさに応じたセクター数を自動で検出し、必要なセクターのみ消去する動作になります。(0=Auto)

【作成したFlashROMプログラムの最終確認をします】

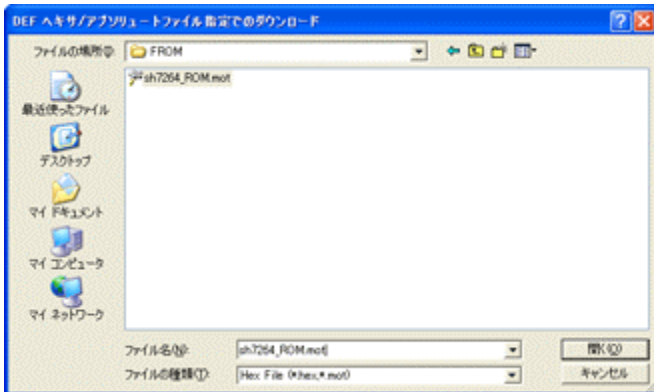
1. デバッガ用コントロールソフト「DEF」を「Start」後、FlashROMに、ダウンロードします。

[5-1]



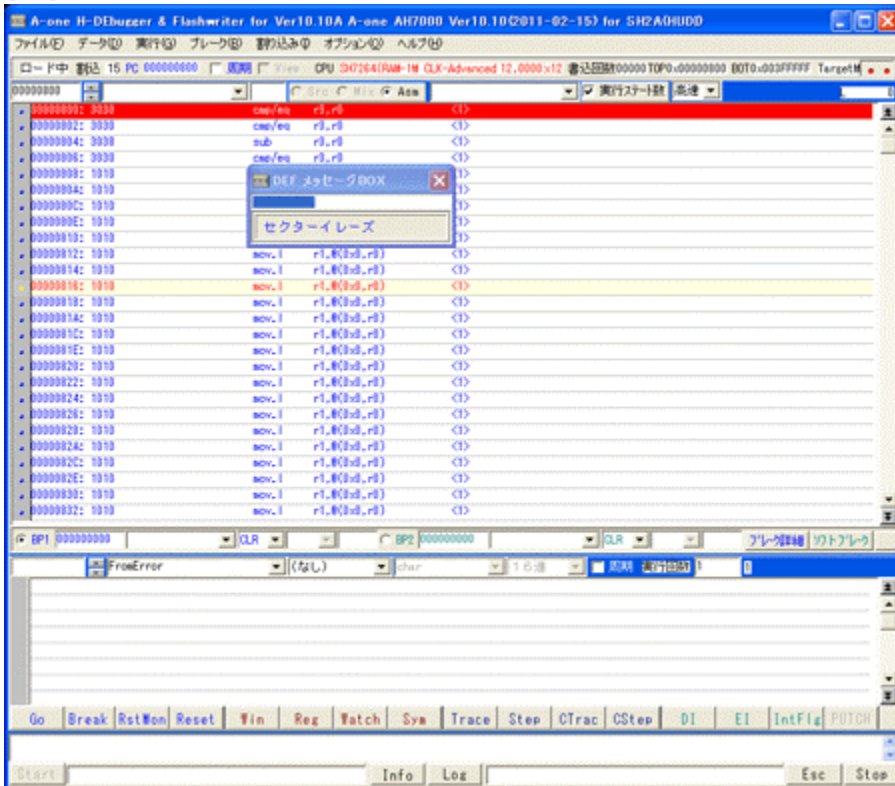
DEFメニュー
 <ファイル>-<ダウンロード>を指定します。

[5-2]



FlashROM内にロケートされたプログラムを選択します。

[5-3]

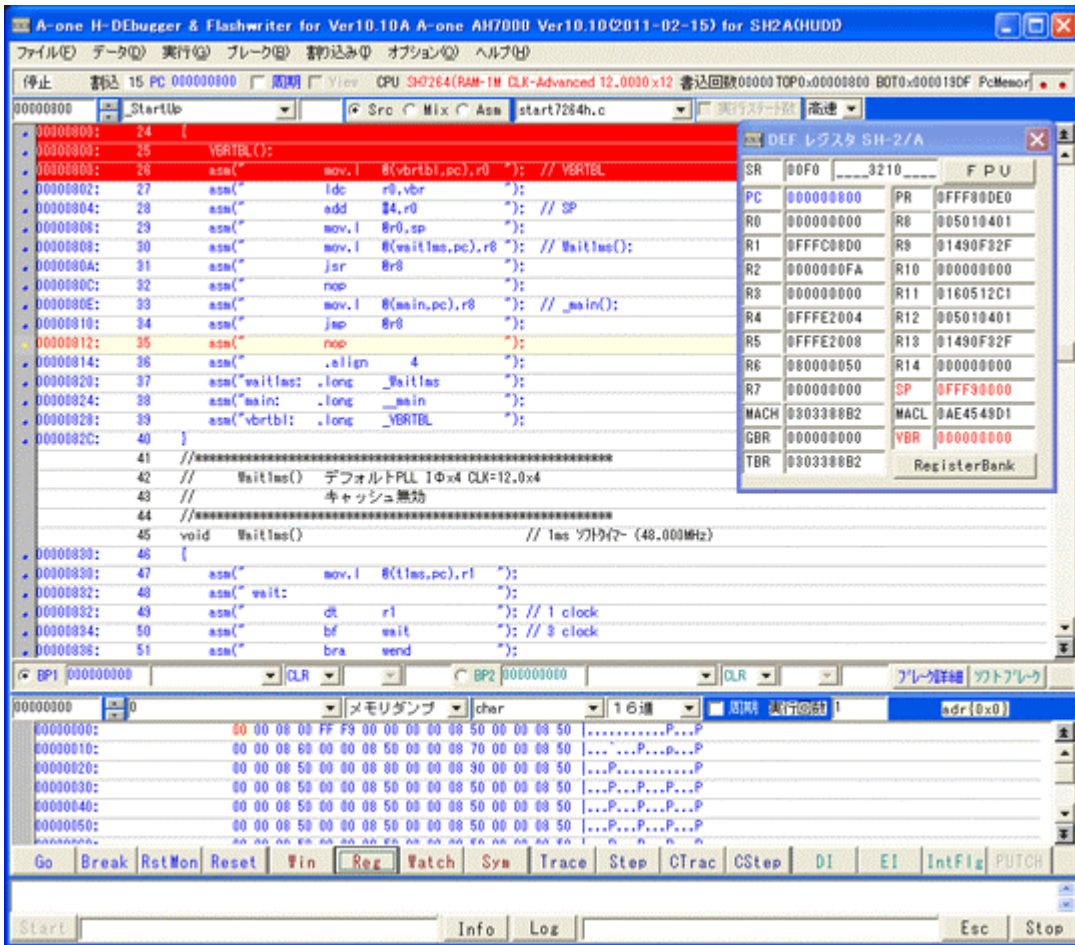


<動作状況>

- 1) 【書き込みプログラムの転送】
- 2) 【セクターイレーズ】
- 3) 【ユーザーモードでダウンロード】

と、順次メッセージBOX表示され、処理が進行します。

[5-4]



<最終確認画面>

全て正常終了しますと、オブジェクトが外部Flash ROMに登録され、このような初期画面になります。



2. 御願ひ

本説の方法で、フラッシュROM品種を追加した場合、必ず、プロジェクトのバックアップすることを御願ひします。
今回は「c:\Program Files\Aone\DEF\from_custom」で作成する例で記述しましたが「from_custom」をホルダごと別のディレクトリに貼り付けても作成できます。
つまり、ユーザーアプリのプロジェクトごとに管理するのも一案かもしれません。追加作成したプロジェクトは、ユーザー様の責任のもとで管理願ひます。

以上で、外付けFlash ROMの品種追加作業が終了です。